

講演「学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善に向けて～児童が自ら学ぶ国語過学習の展開～」

文部科学省初等中等教育局 大塚 健太郎 教科調査官

○ 学習指導要領で目指すことについて

- ・ 全ての教科が三つの柱で定義されているので、小学校の国語としてはやりやすくなったのではないか。
- ・ どこかに力点があるということではない。「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」が両輪で、ハンドルとして「学びに向かう人間性、人間性等」があるというようにバランスよく育てていくことが大切。

○ 主体的・対話的で深い学びについて

- ・ 主体的・対話的で深い学びは授業改善の視点である。これがゴールの学習形態ではない。今までの学習の中から質の高い学びを実現しているものは何かと考えると、この三つの視点があったということ。この三つの視点がバランスよく単元の中で働いていくと資質・能力を付ける学びが実現されていく。この三つの視点のどこかがゴールということではなく、それぞれ違う視点で子どもを見ていくとそれぞれのものが浮かび上がるという形になる。
- ・ 主体的に学ぶ…積極的に、元気に、発言が多いということだけが主体的ではない。学ぶことと自分の生活とつながっているかどうか、粘り強く取り組んでいて、目的に向かって自己調整を行える学習が遂げられているかということ。
- ・ 対話的な学び…声を出す、お互いに話をするというだけでなく、様々なテキスト、周りのもの、過去の自分など様々なものと対話することといった自己の考えを広げるための対話でなければならない。
- ・ 深い学び…言葉による見方・考え方を働かせて、言葉について自覚的にできているか。
- ・ 主体的に…自分の興味・関心のある課題であれば、課題を解決していくためには、対話的にお互いに意見交換をしていく。意見交換がきちんと目的のあるものであれば、そこには言葉の学びが必ずついてくるということ。言葉による見方・考え方を働かせて深い言葉に対する気づきがあるということは、そこから主体的に調べたくなったり伝えたくなったりというように三つの視点がぐるぐる回っていく。深い学びがゴールということではない。

○ 小学校国語科の目標について

- ・ 普段言葉を使って子どもたちは生活しているので、特段学んだという実感がない。教師も何をどう伝えていくのが国語科の授業なのかつかみにくい。そのため、国語科の授業は難しいと感じる教師が多い。
- ・ 国語科で必要となる資質・能力とは何か…テキストであり音声であり言葉等で示されているものや伝わって来るものを誤解の無いように正しく理解する、読み解くということ。自分の中に正しく入ったら次はそれを表現していく又は、伝えていくということ。この資質・能力を身に付けていくということが根本である。
- ・ 普段言葉を使って子どもたちは生活しているので、うっかりすると、何もしなくても上手くなっていくと思いがち。それを自覚化するために言語活動を通してきちんと学んでいくことが重要。

- ・ 言語活動は、資質・能力を育成するための手段。ゴールではない。例えば新聞を作ることがゴールになっては困る。新聞を作るということはそこにどうい資質・能力が育成されるのかということを考えて作ってほしいし、作っただけでなく子供たちがそれを自覚化していくことが必要。
- ・ 言葉による見方・考え方を働かせとは…言葉の対象や意味、言葉と言葉の関係等を自覚化することになっているかどうか。今まで持っている日常である力をそのまま使っているのではなく、その言語活動をするときにその言葉に対して使っているか磨いているかどうか。また、学習を振り返ったときに「こういう働きがあったな。」「こういう風に対象の言葉が関わっているんだ」と自覚することでその資質・能力が育成されていく。
- ・ 授業を作っていく、振り返っていくときに、「この単元で言葉に対する新しい自覚等が芽生えたかどうか。」「それは、どんな言語活動をすると学べるか」ということを考えてほしい。

○ 言葉による見方・考え方と授業改善について

- ・ 言葉がどういう働きをするかということは、例えば単に挨拶をするということができたとしてもその挨拶がどういう働き・機能を又はどういう場面でその言葉遣いをするのかなどを自覚すること。そういうことがあるかどうかということである。単に言葉が使えるということだけではなくて、自覚をもてるかということを考えなければならない。
- ・ 見方・考え方が働くと資質・能力を身に付ける関係が増えていくことになる。子どもたちが言葉に着目し、言葉に対して自覚的になるように授業改善をすることによってアンテナが増え、資質・能力がより身に付く。

○ 学習評価の改善の基本的な方向性、各教科における評価の基本構造

- ・ 今回、評価にも光が当たっている。指導と評価をしっかりと具体化させてそのことを評価していこうということがポイント。評価は成績を付けるためのチェックポイントというイメージがあるが、評価観を確認する必要がある。
 - ① 児童生徒の学習改善につながるものになっているか…幅広い評価をすることが資質・能力を身に付けていくものになっていく。振り返りを書くことが本当に次の課題につながっているか。
 - ② 教師の指導改善につながっているか…次の授業に生かせるものにする。
 - ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していく…単元ごとのペーパーテスト等、本当に必要なのかと考えて評価する。
- ・ 学習指導要領に示す目標や内容と観点別学習状況評価は一对一になっている。学習にきちんと向く評価を行う。

○ 事例 1

- ・ 単元で取り上げる指導事項は年間指導計画に位置付いているはず。一つの指導事項には複数の内容がある。全体を単元の目標にすることもできるし、一部をすることもできる。
- ・ 指導事項は、三つの資質・能力に合わせて整理されているので、文末を「できる」に置き換えることで単元の目標が、「している」とすると評価基準が設定できる。
- ・ 1時間ごとではなく、単元のまとまりの中で評価していく。
- ・ 例のように4つの単元の評価基準を9時間の単元のどこの時間に合わせて評価するのが一番評価ができるかということ、学習活動を計画する段階で、評価の方法やおおむね満足できる子供の姿の両方を考えていくことが大切。

- ・ 知識・技能で B と評価した例…ノートの内容から、情報を集めている、調べて分かったことをまとめられているということの評価していく。
- ・ 思考・判断・表現で B と評価した例…実際書けるかどうかはともかくとして、文章構成表から文章の構成としては理解ができていると評価できる。
- ・ 主体的に学習に取り組む態度で B と評価した例…下書きから、友達や先生のアドバイスから修正を試みている様子、振り返りの記述など様々な様子から評価できる。学習に対して見通しをもって自己調整しているかが大切。
- ・ 長い時間をかけながら、どの評価方法でみていくかをきちんと計画をしないと資質・能力は評価しにくい。

○ 事例 2

- ・ 知識・技能で B と評価した例…ノートに書かれている内容から判断していく。マークを付けているだけでなく、まとめていることで、「理解し使っている」と評価できる。
- ・ 思考・判断・表現で B と評価した例…読み取った情報をまとめて書き出して整理していることで、情報を読みとれていると評価できる。
- ・ 主体的に学習に取り組む態度で B と評価した例…新聞記事やまとめたものを複数用意することで粘り強く自分のものにしていくという足跡を見ることができる。評価する材料はいろんなところにある。

○ 事例 3

- ・ 適切な時間にどの評価方法で何を見るかということ計画していく。
- ・ ワークシートの中のどういう記述または、どういう視点で評価していくことによって、資質・能力を判断していくかということになる。

○ 研究主題について

- ・ 児童が自ら学ぶ国語科学習の展開…児童が自ら学ぶことは当たり前だが難しいこと。教師の都合で学んでいないかを考えながら授業をつくってほしい。
- ・ 付けたい力を明確にし、その力につながる…非常に大事なことである。どの資質・能力または、どの位置にするか精選する。欲張りすぎた指導案が多かった。年間指導計画に沿って指導事項を精選しながら単元のまとまりの中で身に付けていきたい。
- ・ 「関心」を高めたり「自信」をもたせたり…自分のこととして関心がある、自分の生活とつながっているということが大事。自信をもつということは、自分で学習の計画を見通しをもって粘り強く進めた結果、達成できた、理解できた、納得できたということによって自信がつくことになるから、見通しが大切になる。
- ・ 単元構成は、まさに指導と評価の一体化になる。評価の部分を見据えながら単元をつくってほしい。どのような子供の姿を想定するかというように具体的に。
- ・ 主体的に学習に取り組む態度…長い時間をかけて、子どもが学んでいる力を見取っていることが大切。
- ・ 三つの柱に資質・能力で整理されたということは、指導と評価の一体化につながっている。その評価をしっかりすることが資質・能力を育成することの大きな支えとなっている。